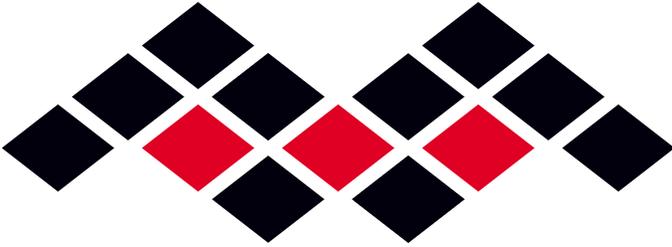


信州松本

名工・名産品

ガイドブック



信州松本

名工・名産品ガイドブック

家具・装飾品

松本家具・松本民芸家具	4
信州からまつ家具	5
手作り家具	6
指物	7
松本てまり	8
松本姉様人形	9
七夕人形	10
松本押絵雛	11
半立体盛絵	12

日用品

提灯	13
松本箒	14
みすず細工	15

木製品

松本漆器	16
お神酒の口	17
初音	18
白樺細工	19
木工芸品	20
楽器製造業	21

繊維製品・陶器

松本紬	22
深山織	23
藍染め	24
万岳焼	25

食品

菓子製造業	26
漬物製造業	27
酒製造業	28
味噌・醤油製造業	29
蜂蜜製造業	30

目次

松本には、城下町としての発展に由来する匠の技、庶民文化やこの地方の気候風土に育まれた様々な工芸品、名産品が受け継がれて来ています。しかし、戦後の近代化、高度成長の過程で、人々の生活や価値観は大きく変化し、自然素材と伝統的な技術を用いて作られる「もの」よりも、安価で使い捨て可能な大量生産の製品が好んで使われるようになりました。この結果、日々の暮らしの中から伝統的な生活文化が失われつつあり、それらと密接に結びついてきた伝統的な産業の多くは、存続を危ぶまれる状況にあります。

その一方で、命の質、生活の質の向上をはかり、癒しを求め、スローライフ、スローフーズが注目を集めるなど、伝統的な産品や地域の生活文化を見直そうという動きが出てきています。

松本市では、「松本ものづくり伝承塾実行委員会」を設け、本物の良さ、手作りの良さ、松本ならではの名産品の良さを知っていただく活動、実際に使っていただく活動、伝統的産業の新たな展開、そして後継者育成について取り組んでいます。

このガイドブックは、松本ならではの工芸品・名産品の良さを改めて知っていただきたい、暮らしの中で活用していただきたい、そんな願いを込めて作成したもので、伝統的な技法に基づいて、主として手作業によって製作されている製品、一度途絶えてしまった技法を復活させたもの、伝統的技法から派生したものを中心に、松本市が平成 17 年度に実施した「ものづくり伝承事業基礎調査」を参考に紹介しています。



松本家具・松本民芸家具

長野県は木材が豊富で、その種類も多く良質です。加えて松本地方は空気が乾燥し、風通しが良いため、木材の乾燥に適していて家具作りに最適な地域です。このように昔から恵まれた自然の中で生まれた「松本家具」の歴史は古く、その誕生は安土桃山時代さかのぼに遡り、昭和51年には、家具業界で初めて通産大臣から伝統的工芸品に指定されました。

「松本家具」（松本民芸家具）の主要な材料であるミズメ桜（梓の木）は、硬く粘り強い、家具の用材としては大変適した木です。しかしその硬さゆえ、加工には機械を寄せ付けず、職人の手によってのみ家具として生まれ変わることが出来ます。

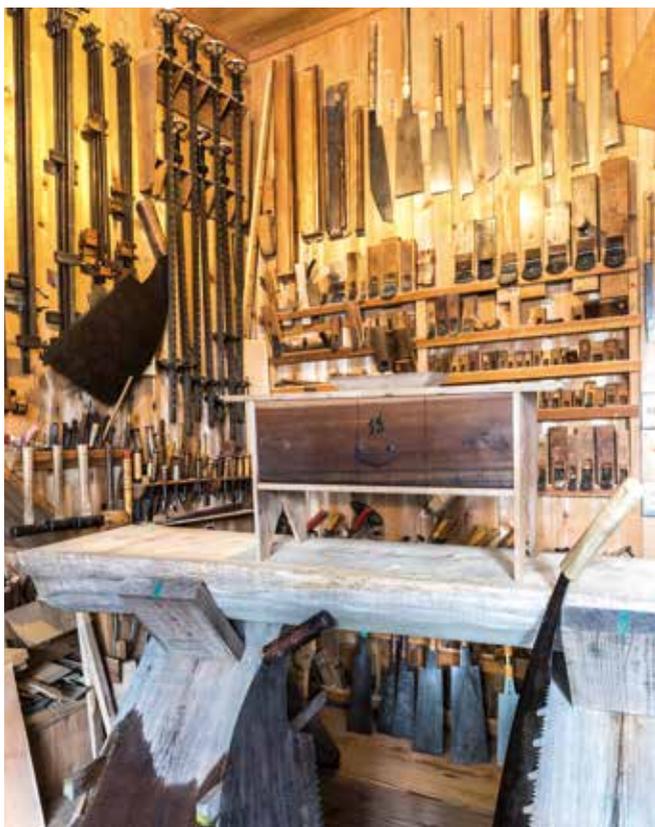
良質な材料と鍛え抜かれた職人の技によって生まれる松本民芸家具は、美しく、堅牢けんろうであり、使うほどに味わい深く、ずしりと胸を打つ重みを持った、生涯の友と呼べる家具です。



信州からまつ家具

昭和 34 年頃から、長野県工業試験場におけるカラマツ材の脱脂・加工技術の研究成果をもとに、長野県家具工業会によるからまつ家具の製造が始まりました。昭和 44 年に「からまつ家具研究会」が発足し、官民一体でカラマツの特徴に応じた部材加工、塗装、組立など製造技術の向上に取り組みました。平成 16 年には「針葉樹家具開発研究会」が設立され発展してきました。

木目が明瞭で美しく、柔らかい風合いを持つ長野県産のカラマツ材を用いて、「ほぞ」、「ダボ」等の部材接合や面取り、表面の研削^{けんさく}・研磨^{けんま}などの加工技術により、様々な箱物家具^{はこもの かぐ}、脚物家具^{あしもの かぐ}を製造しています。



※江戸時代の建築古材・家具古材を再利用して作った収納棚

手作り家具

がくと
岳都松本は江戸・明治・大正・昭和と、それぞれの時代を反映した数多くの家具類を生産してきました。

その中で木と道具と人間が一番近い関係だった時は機械が導入される以前のことだと思えます。

工房「春夏秋冬」は実験工房です。先人たちの知恵に学び、人間の手で作る仕事の重要性和技術を次世代へ伝えるため、丸太の製材から加工・仕上げまで全て“ノンモーター”で行っています。



さしもの 指物

さしもの
指物とは、組み手を見せずに木と木を組み合わせて小物の家具を作る工法です。育まれた材料の目を生かし、あえて余分な装飾を省いた“粋”な作品を手仕事で作っています。



松本てまり

てまりは、江戸時代の古くから伝えられる手工芸品の中でも、特に民俗資料として高く評価され、その技法を守り伝えられているものの一つです。

松本てまりは、山紫水明の信州松本において、江戸時代中期（1750年頃）、松本藩の教養ある婦人の指先から生まれたもので、当時この地方の童女たちの玩具としてもてはやされたものです。その文化的技法は今日なお連綿と守り伝えられ、現在のてまりも当時のままのものを忠実に復元し、それに近代的な色彩感覚を盛ったものです。

松本市立博物館に1750年頃のもの保存され、今日見ても、当時のものがいかに優れたものであったかを伺い知ることができます。

現在は、松本てまり保存会の皆さんが技法を伝えています。



あねさま 松本姉様人形

あねさま
松本姉様人形は、江戸時代から松本の城下町で作られてきた和紙人形で、江戸姉様、京姉様とともに古くから全国に知られていました。日本髪的美しさを強調した人形で、かつては、母親が余った布や紙から作って子どもに与え、少女たちがままごとや着せ替え人形のようにして遊んだと言われています。

商品化されたのは、江戸時代末期からで、昭和初期には、子どもたちの日常の遊び用玩具でした。戦後は、ほとんど作られなくなりましたが、市内の人形店が博物館に所蔵されていた人形からその技法を復活させ、今日に至っています。郷愁を誘う民芸品として、土産品や愛好家の収集品となっています。



たなばた 七夕人形

信州や越後では、江戸時代から七夕行事（月遅れの8月）に、人形を軒先につるして飾る風習がありました。松本地方の七夕人形は、板製、紙製とさまざまで、板のものには着物を着せて飾っていました。特徴的なことは、いずれも男女の顔が描かれていることで、市立博物館が所有する七夕人形コレクションは、国の重要有形民俗文化財に指定されています。

戦後は人形を飾る家庭も少なくなりましたが、市内の数店が人形作りの技法を継承しており、現在に至るまで生産を続けています。近年は古くからの行事を見直す気運も高まるなか、旧暦の七夕にあわせて商店街や通りに七夕人形が飾られ、博物館でも特別展示が行われるなど、松本の夏の風物詩としてふたたび定着しつつあります。



おしえびな 松本押絵雛

おしえびな
押絵雛は、江戸時代中期初め、武家の娘の手習いとして、京都から全国に伝わり、松本では、文化・文政期から天保期に、武家の内職として製作されるようになりました。明治初期には、松本の一大産業に成長しましたが、明治 21 年（1888 年）の大火をきっかけに職人が減少し、昭和初期には技術を保有する人が途絶えてしまいました。

しかし、博物館や民家に残る押絵雛を参考に、松本押絵雛研究会がその技法を復活させ、現在にいたっています。節句等のお祝いにも使われ、県内はもちろんのこと、県外や海外でも人気があります。



はんりったいもりえ 半立体盛絵

はんりったいもりえ
半立体盛絵は、百瀬善明さんが戦後、考案、開発した工芸品です。まず、型枠を彫り、型の中に胡粉ごふんをつめ、型抜きしたものに着色を施すという手順で製作されます。松本城の盛絵も制作しますが、百瀬さんの盛絵でもっとも人気があるのが朝焼けの「赤富士」で、富士山周辺の観光地で売られ、特に、海外からの観光客に人気があります。

百瀬さんは、半立体盛絵のほかにも、木彫による遠近額などの木工芸品の製作も手がけ、長野県木工展では幾度も県知事賞に輝いています。



ちようちん 提灯

ちようちん
提灯の誕生は、室町時代といわれています。あんどん
行灯を持ち歩きやすいように工夫したもので、現在の電灯や懐中電灯の役割を果たしてきました。提灯の絵柄は用途によって違い、かつては、祭りや神事での需要も多く、特に家紋入りの提灯は、一家のシンボルとして氏神様の祭りの折などに燈され、また、商都松本の反映と威勢を示すシンボルとしても立派な提灯が作られました。近年は、需要そのものが減少し、祭りに家紋入りの提灯を掲げる家庭も減少傾向にあり、松本市内の提灯屋さんには2軒を残すのみです。



ほうき 松本箒

ほうき
箒は、全国に産地がありますが、信州では、松本（野溝）と中野で作られてきました。この地で箒づくりが盛んになったのは、土地が乾燥していて、箒草（ホウキビ）の栽培に適していたことからで、その歴史は慶応年間まで遡ることができます。農家の副業として、最盛期には120戸から130戸の農家で作られていましたが、電気掃除機の登場などに押されて、現在は、箒の文化を継承する意味合いで製作されています。草の香りが残り、しなやかで耐久性もたかく、座敷の掃除などに一家に一本欲しい品です。



みすず細工

みすず細工とは、わりたけ割竹を編んで作る生活用品のことです。松本や東筑摩ちくま郡の副業・伝統産業として名高いものの一つで、明治30年代に生産のピークを迎えました。生産者の多くは、のうかんき農閑期の農家で、原料となる篤竹（スズタケ）の別名がみすず竹であることからみすず細工の名が生まれました。行李や文庫、ざるなどの生活用品が作られ、やなぎむねよし柳宗悦の著書でも紹介されています。



しっき 松本漆器

しっき うるし
漆器とは、漆を塗って仕上げた器や道具の総称で、装飾性、保存性に優れ、古代から装飾品、生活用品、建物などに塗られてきました。松本の漆器は、木曾漆器の流れをくんでいます。松本・木曾地方に豊富な^{ひのき}桧をはじめ、^{かつら}桂・^{とち}栃などを木地として、座卓・盆・膳・ひろぶたなどが作られてきました。

松本城主お抱えの職人やその子孫が明治から大正期に木曾から松本へ移り住んだのがルーツで、かつては中町に漆器屋が10軒ありました。松本漆器工業組合にも数年前までは、12名の組合員がいましたが、急速に減って、現在は、2名になっています。仕事の主体も漆器づくりから修理に移りつつあります。



お神酒みきの口

お神酒みきの口は「おみきすず」ともいい、松飾りとともにとしがみ歳神様や神棚に
 供えるお神酒徳利とっくりにさして飾る竹細工の縁起物です。かつてお神酒の口を
 飾る習わしは松本市域に広くみられ、暮れの30日頃になると一対一組で神
 棚のお神酒徳利にさし、大晦日おおみそかにそのお神酒をいただいたといわれていま
 す。お神酒の口はそのまま飾り、1年後の三九郎さんくろうで焼いたりすることが多
 かったようです。

お神酒の口は、平成10年には国の記録作成等の措置を講ずべき「無形の
 民俗文化財」に選択されました。



はつね 初音

はつね
初音は、竹製の笛で、今から 70 年位前までは、おおみそか大晦日の晩、除夜の鐘が鳴る頃になると「初音～、初音～」の呼び声で、町や村に初音売りがやってきました。子供たちは、待ちかねたように初音を買ってもらい、二年参りや初詣にでかけていました。

初音は、お正月のしめ飾り同様、誰でも作れるものです。多くの皆さんに松本の年末の風物詩の復興に参加していただきたいと思います。



しらかばざい く 白樺細工

ライチョウ彫りは、しらかばざい く白樺細工のひとつです。松本平に白樺細工が誕生したのは、大正初期と言われています。日本山岳会まきゆうこうの榎有恒氏から聞いたスイスの登山人形をヒントに、彫刻師の清水湧水氏が白樺の丸太に登山人形を刻んだのがはじめと言われています。

その後、白樺を材料にした壁掛けやこけしなどが創作され、白樺の白い皮が「山」をイメージさせ、都会の皆さんを中心に山の土産品として好評を博してきました。中でも、近年、人気の高いのが北アルプスに生息する、長野県の県鳥でもあるライチョウを彫った「ライチョウ彫り」です。



木工芸品

しらかほざい く
白樺細工の流れをくみ、地元産の木材を使った様々な木工芸品が開発・製造されるようになりました。かつて松本市には150余名の製作者がいましたが、バブル崩壊後徐々に不況の波が押し寄せたこと、またその一方で職人の高齢化、後継者不足もあり、近年業界規模は縮小しています。しかしながら、木本来の温かみ、そしてそれを製品へと加工する職人の巧みな技は、プラスチック製品のような大量生産品では得がたい貴重なものです。



楽器製造業

松本の乾燥した空気が楽器の製造に適していることから、松本には、日本を代表するギターメーカーやエレキギターメーカーがあります。1960年代のビートルズやベンチャーズの来日によって、一大エレキギターブームが起こり、その後もフォークブームが起きる中で松本地方のギターメーカーは着実に業績を伸ばし、昭和58年には、エレキギター生産高世界一を記録しました。

しかし、その後ギターブームも一服し、また、ギターの生産拠点も、労賃が安い中国や韓国へシフトし、松本市内のギターメーカーの数も減りましたが、かつての有名ブランドOEM生産から、自社ブランド製品の開発やオーダーメイドに特化し、大量生産方式から半手工業の手法による差別化を図った結果、トップミュージシャンからも高い評価を得ています。

松本市内にはギター、エレキギターの他にも、同じく弦楽器であるヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの職人もおり、こうした楽器製造の分野でも「楽都・松本」を大いに盛り上げています。



松本紬^{つむぎ}

伝統的工芸品の信州紬^{つむぎ}のなかでも、伝統的技法の粋をつくして作られる松本紬は、松本市を中心にして、安曇野にわたって織られている民芸手織紬です。

豊かな自然に囲まれる中で、その清冽^{せいらつ}な空気がそのまま糸と化したような、緑色に輝く有明の天蚕糸、裏山に自生する植物たちから、その色とともに、命をいただく草木染^{よこいと}、緯糸一本一本を目に見えない永遠の時間の流れをそこに写し出すかのように織り込んでいく手織。そんな自然と職人の手技とのハーモニーが生みだした「松本紬」です。



み やまおり 深山織

古布を裂いて、それを横糸として織り込む織物で、山深い地域で作られることから深山織と名づけられました。安曇地区には、元々機織はたおりの伝統がありましたが、昭和30年代の終わりには、ほぼ無くなっていました。それが39年のダム建設を期に、農業収入が減ることを見込んで、観光による収入を得ようとはじめられたもので、筆入れなどの小物類、スカーフ、バッグなどを製作しています。

夏は、風穴の里（道の駅）に併設されている「みどの工房」で機織はたおりが行われ、機織体験も出来ます。冬は、店舗横の工場で織られています。



あいぞ 藍染め

藍染めは、古くから日本各地で行われ、阿波藍などが有名ですが、松本でも江戸時代には、広く行われるようになりました。松本の藍染めは、型染めを行う権利が一部の人に限られていたため、絞り染めが大半でした。それが江戸時代の終わりには、解禁されて、誰でも出来るようになり、明治の終わり頃まで盛んに行われていました。

しかし、化学染料の普及とともに、藍染めも徐々に衰退し、今では、松本で藍染めを行っているのは、「藍染 浜染工房」1軒となってしまいましたが、反物、^{たんもの}テーブルセンター、浴衣、のぼりなどが作られています。



ばんがくやき 万岳焼

ばんがくやき
万岳焼は江戸時代の後期、松本藩御用窯（旧浅間焼）を発端としています。浅間で土が取れなくなったことから、大正期に宮淵に移り、その当初は「宮淵焼」の名がついていましたが、何時の頃からか万岳焼と呼ばれるようになりました。万岳の呼称の起源は、はっきりしていませんが、松本が山に囲まれていることが由来だろうと考えられています。

現在、六代目木村万岳さんとその子息七代目木村岳史さんがその炎と伝統を守りつづける一方で、現代の陶芸に通用する技術と芸術を探究し、常に新しい作品に挑戦しています。青磁の他に釉裏紅や染付、色絵、金銀彩などの作品を創造しています。

また、一般向けに、手びねりによる茶器・鉢などの製作や素焼作品への絵付けをする陶芸教室も開催しています。



菓子製造業

松本は、城下町として栄え、お城に出入りする商人らを中心に菓子づくりが始められました。松本は、年間を通じて、湿度が低く、地下水が豊富なため、生菓子・半生菓子が多く作られ、全国的にも有数の菓子の産地として知られています。半生菓子とは、カステラやあんものを中心とした菓子を自然乾燥させて、日持ちを良くしたものです。

松本では、生菓子・半生菓子に限らず、和菓子、洋菓子づくりも盛んで、100軒を超える菓子屋が、独自の味を競い、まさに百花繚乱^{ひゃっかりょうらん}、くるみや栗などこの地域ならではの材料を生かした、バラエティーに富んだ菓子が作られています。

また松本平はその乾燥した空気と清冽な水をもって^{あめ}飴作りも盛んな土地で、江戸時代創業の老舗の飴屋も数多く見られます。新年のイベントである「松本あめ市」では様々な種類の飴が市内を彩ります。



漬物製造業

山国信州では冬が長いので、保存食としての漬物が各種あり、食卓を彩っています。松本を代表する漬物は、野沢菜漬、セロリー粕漬、わさび漬、各種みそ漬などです。漬物は、野菜を生食するために、昔から行われてきた保存食ですが、「ビタミン類・食物繊維が豊富である」、「疲労回復の役目をするアルカリ性食品の代表格である」、など現代の栄養学から見ても、理想的な食品であることが分かりました。漬物は塩分が多いと思われがちですが、野沢菜3～4%、白菜2.6%、わさび漬2.4%と、醤油6.6%に比べ多くはありません。業界では、いかに塩気を抑えておいしく作るかの研究をしています。松本平の豊かな農産物から作られる漬物で、健康な体づくりをしてみませんか？



酒製造業

日本の屋根北アルプスを望み、その山々を源とする豊富な伏流水^{ふくりゆうすい}は酒造りに適したミネラルを豊富に含み、麹菌^{こうじきん}を良い状態で育成させ、酒母^{しゅぼ}や醪^{ちるみちゆう}中で蒸し米が良く溶けるよう酵素の作用を助けます。湿度の少ない爽やかな夏、きびしい寒気が一段と冴える冬、どこまでも澄んだ空気、四季折々の自然環境が良質の酒米を産出します。酒造りに必要な全てを備えた信州松本でこそ醸し出せる日本酒の魅力がそこにあります。

米を選び水を選びそして仕込み～発酵～ろ過～火入れと、気の抜けない行程を一つ一つ慈しむように長い時間をかけゆっくりと醸される信州松本平の清酒。長野県酒造組合松本支部に所属する酒蔵は、品質本位の酒造りを心掛け、手造りにこだわり、この地の自然や風土に根付いた地酒造りを伝承しています。

『適度な飲酒は百薬の長』とも言われますように、日本酒には、ビタミン、アミノ酸、ペプチド、麹（こうじ）酸など新陳代謝を高める成分がたくさん含まれており、善玉コレステロールを増やす効果があります。美容と健康のために適量飲酒で、松本平の地酒を楽しんでみてはいかがでしょうか？



味噌・醤油製造業

松本は、清冽な雪どけ水と澄んだ空気に恵まれ、味噌をはじめとする諸醸造の食品に適した土地柄です。各工場では味噌玉をつくり一年以上熟成させる昔ながらの製法で造っている味噌、天然赤味噌の二年味噌、三年味噌などの長熟味噌などが造られ、それぞれ根強い人気を持っています。

味噌は、良質のタンパク源である大豆を原料としており、炭水化物・脂質・ビタミン・ミネラル・灰分かいぶんなど、体調を整えるのに必要な必須アミノ酸が10種類以上も含まれた、栄養補給という点において理想的な食品です。その他、タバコのヤニを取り除く効果や、美肌効果、骨粗しょう症への効果など、味噌は驚くほどのパワーを秘めています。全国の味噌総生産量の30%を占める「味噌王国信州」の味噌を、是非ご賞味ください。

醤油もまた逸品揃いです。



蜂蜜製造業

蜂蜜の歴史は、約1万年前とかなり古く、昔から食べられてきました。現在は、レンゲに変わりアカシアの蜂蜜が主役となっています。その他、蜜を豊富に分^{ぶん}泌^{びつ}しないため、希少価値が高く、加えて芳醇^{ほうじゆん}な香りが喜ばれている「りんごの蜂蜜」や、ビタミンB・ビタミンPなど老化防止に効果がある要素が含まれている「そばの蜂蜜」など種類が豊富です。

また、信州では、昔から「地スガレ」と称し地中に巣がある学名「クロスズメバチ」を食用としています。信州蜂の子生産組合では、ミツバチの幼虫に3日間ローヤルゼリーを与え、あとは蜂蜜、花粉を主食に育ったものを原料に、蜂の子缶詰を開発、製造して、全国に出荷しています。山里の栄養食品として生まれた「蜂の子」、貴重なタンパク源として信州人がなじんできた食文化で、都会の方には抵抗があると思いますが、一度食べるとやみつきになる方が多いといわれています。

卷末資料

旧版のガイドブックには掲載していましたが、事業者、担い手の高齢化などに伴って、現在事業活動が小規模となってしまった伝統工芸品として下記のものがあります。

松本張子

松本張子人形の発祥は、およそ 1850 年頃と言われています。餌差町の桐原家で、大阪の流れを汲む張子人形が作られたのが起源です。当時は、1 軒だけでの生産で、明治に入り 2 軒になり、明治の中ごろには、かなりの生産量を誇りましたが、昭和 40 年頃には、廃絶。松本張子には、天神様が多く、その他には、大黒様やだるまなど縁起物が作られていました。

刃物

機械化や安価な外国製品が入ってきたことから昔ながらの鍛冶屋さん、すっかり少なくなりました。松本市内には親子 2 代に亘り、大正、昭和、平成の永い間伝統を守ってきた鍛冶処がありましたが、体力的な限界から平成 26 年 4 月に惜しまれつつも事業を休止しました。

表具

表具は、平安時代頃に経典を巻物にしたのが始まりとされ、京都を中心に歴史的な書画が集まる地域に表具師が集まると言われ、松本もその一つでした。

信州松本 名工・名産品ガイドブック

平成 29 年 3 月改訂

発行 : 松本ものづくり伝承塾実行委員会
松本市役所産業振興部商工課内
〒 390-8620 松本市丸の内3番7号
TEL 0263-34-3270 FAX 0263-34-3008
URL <https://www.city.matsumoto.nagano.jp/>
印刷・デザイン : 株式会社プラルト



SHINSHU MATSUMOTO
SPECIALTY
GUIDE BOOK